

心をととのえて 楽にいきる言葉

ブッダ・
聖書の
教え

別冊プレジデント

PRESIDENT

PRESIDENT MOOK



今、
苦しいのは
あなたの
せいじゃない

もういい人で
いるのはやめよう
運を掴む、
賢人の教え

稲盛和夫

人生の最後を幸せにしてくれるもの

志村けんさん・岡江久美子さんの

コロナ死が変えた葬儀の形

近年、変わりつつあった「日本のお葬式」。そこにコロナの来襲。全国葬儀社の団体・全葬連会長に、コロナ禍での「新しい弔いの形」を聞いた。



自宅に戻った岡江久美子さんの遺骨を抱えてメディアに一礼する夫・大和田隼さん。日本全国に衝撃を与えた。



全日本葬業協同組合連合会会長 石井時明
1956年、神奈川県生まれ。父の急逝により、県立小田原高校に在学中、創業2年のさがみ葬儀社後の富士見斎場（秦野市）を継ぐ。同名のセミナーホールも運営する。全日本葬業協同組合連合会は、56年設立の葬業専門事業者団体（会員57事業協同組合、所属員1277社。2018年から会長を務める）。

新型コロナウイルスと共生時代に入り、お葬式は変わったか。志村けんさん、岡江久美子さんが亡くなったとき、感染予防のため身内ですら顔を見ることもできなかったと報じられたが、新型コロナウイルス以外で亡くなった人の弔いはどうなのか。

全国1277社の地域に根ざした葬儀社が所属する全日本葬業協同組合連合会（以下、全葬連）会長の石井時明さんに聞いた。

まず、コロナ禍以前の近年のお葬式事情から教えてください。

「葬儀の需要がほぼなくなり、20〜30年前なら普通だった200〜3000人規模の一般葬も非常に少なくなりました。十数年前から「家族葬」が広まったのはご承知のとおりです。

その家族葬も、以前は故人にご縁のあった方を見えましたが、「来なくていい」「行っただけいい」という雰囲気になり、20〜30人規模が中心になってきていました。

そのような葬儀状況の中で、コロナ禍となった。感染死した方々の見送りは家族葬でもできなかった。

新型コロナウイルスの感染で亡くなった方は納体袋に納められ、多くの

場合火葬場へ直行となりました。厚生労働省が指定感染症としたことから、遺体を非透過性納体袋に収納・密封するよう通知が出て、その指示に則った方法だったのです。現実問題、お葬式を行うのは難しくなりました。

理由は2つ。一つは、通常のお葬式を行うと、ご遺体からの感染リスクが免れないこと。もう一つは、ご遺族に故人と濃厚接触した方がおられ、葬儀会場が新たな感染源となってしまう可能性があります。もっとも、ご遺族が強く望まれ、故人のお顔を見てお別れできるよう透明の納体袋を用意して、お葬式を行ったケースもありました。

コロナで亡くなった方のお葬式を行った場合、コロナ以外で亡くなった方のお葬式にも影響が出ましたが。

もちろんです。葬儀会館で隣同士の部屋を使うことができません。先述のとおり、コロナで亡くなった方のご遺族には濃厚接触者が含まれていますから、コロナ以外で亡くなった方のご遺族と通路などの共用は非常に危険です。そのため、消毒の徹底はもちろん、使用する部屋を大きく離し、時間差で行っています。私も全葬連は、内閣

府が提示した「新しい生活様式」を踏まえ、業界団体共同で「葬儀業『新型コロナウイルス感染症拡大防止ガイドライン』」を作成し、各社にこれに則る葬儀を推奨しております。

そのガイドラインの内容は？
「ご遺族、参列者に手指消毒、マスクの着用をお願いする。葬儀会場内の座席やお焼香の動線には1m以上、可能なら2m以上あけ、ソーシャルディスタンスを保つ。火葬場へのマイクロパスも間隔をあけて着席してもらおう。通夜振る舞いは大皿を避けて個々に提供する。など細かく設定し、最大限の配慮をしています。

全国的に、ですか。
葬送の文化・慣習は全国各地で違い、コロナ感染者の非常に少ない県もありますが、葬儀で感染者を絶対に出さないという思いは一致していますから。ご遺族も感染リスクに敏感になっておられます。例えば通夜振る舞いは元々出さないところがあれば、必ず出すところもあります。東京は後者ですが、



全葬連が会員の葬儀社向けに作成したコロナ対応によるガイドライン。防護服着用の実例。



コロナ対応の搬送ガイド用デモ写真。遺体が看護師によって納体袋に納められる様子を示す。

お弁当形式の持ち帰りか、あるいは取りやめるお葬式が増えました。

また、コロナ禍で以前にも増して全国的にお葬式の規模が小さくなりました。「おじいちゃん」が亡くなったとき、喪主さんが、故人のご高齢のきょうだいに「コロナ禍だから、もし感染させてしまったら大変だ」と知らせない。知らせても「こんなときなので行くのはやめておこう」と思う人もいます。結果、直系家族3〜4人だけのお葬式を希望されます。

オンライン葬儀というのも、メディアに登場するようになりましたね。コロナの前から元々、葬儀の模様をビデオに撮影して、それをお客様に無料でお渡しするというサービスをやっている葬儀社がありました。それをネットにつなげた形が、コロナ以後、オンライン葬儀と言われているんです。話題となつているようですが、実際のところ、オンライン葬儀をやっている葬儀社は全体の1割もないのではないのでしょうか。

新しいスタイルとして定着するほどではないのですね。

スタイルといえば、お葬式には本来、人と人のつながり、助け合う感覚など日本人が大切にしてきたことが詰まっています。古くは「村八分」という言葉がありましたよね。結婚式、成人式、出産の世話など8つの事柄では地域から排除される者も、火事の消火活動とお葬式の2つは許された。お葬式はそれほど相互扶助が必要とされ、昭和40年代頃まで、隣近所で一所懸命お手伝いして行われたのです。

石井さんは、その頃のお葬式をどう存じなんでしょうね。

はい。昭和47年に家業の葬儀社を継ぎましたから。地元は神奈川県秦野市ですが、隣近所総出で祭壇を組み、料理を作り、野辺送りを行っていました。弊社が地域の良き風習をある程度踏襲しながら、祭壇の貸し出しや司会進行などプロデュースを始めた。ご遺族の構成や心情、経済事情は1000人いれば1000通りの見送り方があります。オーダーメイドのお葬式を施行してきました。

全国的に葬儀会館が増えたのは昭和60年代でした。時代の流れで、お葬式の大型化、小型化と変わる中で、儀礼が廃され、お葬式のパッケージ化が進んできました。
長い歴史を経たうえで、コロナによるお葬式の変容だった。

お通夜をしないで告別式だけを行う「一日葬」も増えました。お通夜も告別式も少人数で同じ顔ぶれなら、儀式は1回でいい。お通夜は省略しようというところでしょう。しかし、すべてが家族葬と一日葬になったわけではなく、一般葬をされるご遺族もいらつしやる。その場合、我々のほうから「事前焼香」を提案し、行われるようになりました。

事前焼香？ 初耳です。
午後6時からのお通夜なら受付を4時からに早め、「ご都合の良い時間にいらつしやってください」と案内する。来られたら随時お焼香をしてみようので、「事前焼香」と呼んでいます。分散して来ていただき、葬儀会場内の密を避けるためです。ほとんどの会葬者がお焼香を終えて故人の顔を見るとお帰りになります。

事前焼香で多くの方が早い時間に来られるなら、遅い時間帯を家族での親密なお別れの時間にできそうです。はい。ですから事前焼香はコロナが収束してからも続き、定着すると踏んでいます。今後の潮流はまだ見えませんが、改めて思うのは、多くの人にとってコロナ禍が死を身近に感じる機会になったであろうこと。「お別れは大事」と思う人が増え、葬儀の大切さが再認識されたと感じます。我々葬儀社は、故人様を尊び、ご遺族、会葬者双方の意を汲んだお別れの場を提供しなければと決意を新たにしております。